

課程の保護者対象にニーズ調査を行いました。回収率は47%でしたが、回答者の8割が重心認定を受け5割が要医ケア児だったことから、当事者がこの調査に関心を高く持った事がわかります。

また利用希望状況に関しても、重心児ならではの特性が見られています(図1)。そして自由記述には、スペースいっぱい書き込まれたリアルな声が多数寄せられました。母親自身が疾病を抱えているにも関わらず通院もままならないとの訴えには、胸が締め付けられ、どうかしなくてははいけないという思いがより一層強まった事を覚えています。

図1： ニーズ調査結果

利用の仕方について	定期的な利用・・・32% 不定期な利用・・・68%
1ヶ月に利用したい回数	平均 5.8回
保護者の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・送迎 ・長期休暇や土日祝日に利用したい ・使いたい時に使える・緊急の利用に応じてもらえる ・肢体不自由児だけの居場所がほしい ・兄弟児の用事がある時に利用したい

囑託医・小口先生のサポート

おぐちこどもクリニック院長の小口弘毅先生は、大学病院のNICU勤務を経て開業され、診療のみならずNICU退院児の成育支援も手がけていらっしゃいます。そういった先生との御縁があり、囑託医を快諾していただけた、クリニックと同ビルの1室で事業を始める事が出来ました。

子ども達には、利用契約するにあたり入会診察として必ずクリニックへ受診をして頂きます。主治医からの診療情報提供書を元に、成育歴から現況や医療的ケアの内容等の聞き取りが行われ、小口先生からの指示書を作成して頂きます。

クリニックの看護師さんが、気軽に相談に応じて下さっている事も安心材料の一つです。子ども達が来ている最中も、ドアをノックして「今日は何人来ているの?」と頻りに覗いて来て下さる先生。クリニックの温かいサポートがあり、ぼっちぼっちは成り立っています。

開所して増えた笑顔

最初はお互いに緊張していた子ども達とスタッフですが、回数を重ねるたびに自然に笑顔が見られ、温かい雰囲気の中で放課後を楽しめるようになりました。家庭や学校以外での人間関係の広がりや社会性を育み、きっと将来の自立へ繋がるものと期待しています。

また親御さんにも変化が見られました。疲れた表情だったお母さんが、「ぼっちに行っている間に美容院に行ってきたの。」とお洒落して綺麗になられた様子を拝見すると、こちらも頑張った甲斐があったと嬉しくなります。気持ちに余裕が持てるようになった証拠です。子どもも親御さんの笑顔が増えることが、きっと家庭に潤いをもたらしてくれるでしょう。ぼっちぼ



ちで出来ることは微力ですが、少しでも地域生活が豊かになれば良いと心がけています。

今後の課題

すでに利用調整が困難になるほど一杯で、全てのニーズを賄いきれなくなってきました。各地域で地元のお医者さんと連携して、このような事業所が増えて欲しいと願っています。重心児に対応出来る看護師やスタッフの人材確保や人材育成も課題です。また、キャンセルが発生しがちな事業の為、安定した経営が出来るように何か支援策があると心強いです。

そして最後になりますが、私自身は5年前に次男が他界した重心児の母親です。生意気なようですが、元当事者が事業所の管理者を務めている事は、決して良い事だとは思いませんし、美談のように捉えて頂きたくありません。そんなことをしなくても、当たり前のように重心児の社会資源を創設されるのが、本来あるべき社会の姿だと私は切に思います。